与那国島における伝統工芸従事者への聞き取り調査(1)

片　本　恵　利

1．はじめに

筆者は、今日を生きる日本人、沖縄の人々のこころに今起こっている問題に関心を抱き、これまで沖縄本島北部地方を主なフィールドとして、沖縄の伝統文化・風土・民間信仰などの調査を通じて今日の我々の生き方について臨床心理学的立場から研究してきた。本稿では、南島文化研究所与那国島総合調査の一環としての、与那国町における青年会会員および伝統工芸従事者への聞き取り調査と参与観察で得た資料のうち、2005年８月から2007年２月までに得られた、伝統工芸従事者への聞き取り調査の資料を掲載する。伝統文化と今日の生活をつなぐ営みに積極的に参加している人たちの生き方、考え方を描写することで、今日を生きるわたしたちの自己実現やアイデンティティ形成に関する新たな知見を得るための資料としたい。

2．与那国島の織物

(1) 与那国の織物

1）与那国の織物

15世紀半ば、朝鮮漂流民による与那国島の織物の最初の記録がある。これによると、苧麻(ちょま)から糸を取って藍で染め、筬(おさ)や杼(ひ)を用いて布を織っていた様子がうかがえる。

王朝時代、花織は役人だけに着用が許されており、貢納布であった。第二次世界大戦前には、綿の花織が織られ、濃紺一色で仕上げた男性用の着物があった。

明治時代には、無地に近い濃紺に白の絣が入ったものも着られていたという資料がある。

第二次大戦後、苧麻や芭蕉はほとんど使われなくなり、現在、綿や、より高い収入の得られる絹を使っている。

2）与那国織の分類

与那国織の製品には、以下のようなものがある。

与那国花織

　ドゥチン（＝四つ）花

　イチチン（＝五つ）花

　ダチン花

イルク花

ミング花

与那国ドゥタティ

ゴバンドゥタティ

カタンカアヤドゥタティ

ケラマキ　　～緯絣入り

フディリドゥタティ　　〃

ミンダツアミ　　～男物

ミンナのゴバン　　〃

イチ玉のゴバン　　～女物

ナナ玉のゴバン　　〃

ミディルディ　　〃

（与那国町伝統織物協同組合リーフレットより）

①与那国花織は、両面浮花織が特徴で、裏表同じ模様に仕上がる。「「読谷山花織（ゆんたんざはなうい）」とも「首里花織」とも違うのが「与那国花織」であり、ヨコ糸によるヨコ花が織り込まれ、裏に浮糸は出ない。一見したところ布に表裏がないのは「首里花織」とおなじである。」（澤地、2000）

②与那国ドゥタティは庶民の着物で、黒、青、白の三色を使った講師縞が基本である。「「どぅ」は数字の「四」を意味する。半幅で短い左右の袖二枚、膝下までの身頃二枚、あわせて四枚の布で仕立てられるきものは、黒い衿がアクセントになっていて、一反で二枚分取ることができる。そして、いかにも涼しげで合理的なきものである。」（澤地、2000）。これに帯としてカガンヌブー（後述）を締める。両面浮花織を取り込んだものもある。

③与那国シダディは、ティサジ（手巾）のことである。

④与那国カガンヌブーとは、ミンサー（細帯）のことをいい、縞の中に絣模様（ミウトゥ（夫婦）絣）が入る。

（2）与那国町伝統織物事業協同組合と伝統工芸館

1）与那国町伝統織物事業協同組合（平成15年3月現在の資料による）

名　　称	与那国町伝統織物協同組合
所 在 地	沖縄県八重山郡与那国町字与那国175－2
設立年月日	昭和58年4月21日
組合員数	54業者（平成15年3月現在）
出 資 金	690,000円
役　　員	理事7名、監事2名

沿革

昭和40（1965）年　琉球政府の工業信仰症例補助事業の適用を受け、織物技術要請事業始まる

昭和45（1970）年　与那国織物組合・与那国民芸品組合が発足

昭和48（1973）年　与那国町織物事業協同組合と改める

昭和53（1978）年　与那国町伝統工芸館が完成・織子要請補助事業に基づく本格的な後継者育成事業始まる

昭和58（1983）年　与那国町伝統織物事業（ママ）協同組合と名称を変更

昭和62（1987）年　通産省伝統産業法により伝統工芸品に指定

平成２（1990）年　与那国織フィルム完成

平成３（1991）年　「与那国織」発刊

２）伝統工芸館

用地面積　488㎡　建物面積　300㎡　コンクリート２階建て

一階　事務室、検査室、売店、作業室、染色室

二階　育成室、展示室、作業室

３．調査の概要

（1）調査期間

＃１　‘05．８．24．～８．26.

＃２　‘06．３．11．～３．12.

＃３　‘06．８．７．～８．10.

＃４　‘07．２．25．～２．28.

（２）調査方法

場所：与那国町伝統工芸館

調査対象：与那国織物組合員・事務職員

手続き：参与観察およびインタビュー。

参与観察・インタビューは一対一のことも、同時に複数の対象者がいることもある。面接構造を厳密に決定するのではなく、対象者が仕事をしている場を訪問し、作業をしながら、あるいは作業の合間に、相手の話に耳を傾け、ときどき質問をする、という方法である。筆者は、原則としてインタビュー時には記録をとらず、調査場所を離れてからフィールドノートを作成した。本稿で使用した資料は、このフィールドノートである。

4．調査の記録

以下に、聞き取り調査の経過を記す。

聞き取りの相手が語った内容を主とし、「　　」　は他の人の発言、（　　）は筆者による補足、〈　　〉は筆者の発言である。

（1）＃1 ’05．8．24．～8．26．

8．25.

9時過ぎにバスで役場まで向かい、教育委員会職員の案内で伝統工芸館へ行く。建物正面で絣ずらしをしている人が数名いる。

工芸館2階作業室のテーブルに、Aさん（中心的存在のベテラン）、教委職員、筆者で着席。

（Aさん）始めて50年くらいになる。今はお金になる。1反織ったら10万。講習は、初級が綿で、半年やり、半年休みだが、休むのを嫌がる人もいる。

上級は絹を使う。半年では織れる。苧麻は、講習の始めにやる。経（たて）は綿（ヘット～細い）を使う。講習生は5名で、今回は島内の人のみ。1名、初めて男性が参加している。

カジマヤーの記念品で100本（帯の）注文があり騒いでいる。一人3本割り当てにした。〈人頭税の世界だなー。〉できないとはねる人もいる。機は、3人で9本取れる。

東京、京都から、○年何月まで40本、と注文があり、重なっているが、問屋は問屋で大事だけど、これ（＝記念品）先に、と言っている。

中学生5人が、郷土学習で機織をした。機は6万～8万で、本島から買う。ここに置けなくなって今は学校に置いている。ここにあると、そばでいろいろしてるの見ながらできたが。（郷土学習は、6種あるうちのひとつ。（花織、組踊、棒踊、他。）

着尺の小売値は一反7，80万。ホテルでは100万とか。問屋も、招待して芝居見せたり食事誘ったり、展示会も食事食べさせたりするって。でも、自分たちはこんな難儀してわずか10万だのにって思う。（有名なデザイナーがいて、その人に頼むと）デザイン料といって、縫うだけで17，8万とる。（これも縫い子さんは1/10だったりして、と笑う。）

組合員は、自分の家で織る。（でき上がったものを組合に持ってきて）検査通っていくら、となる。検査員は、前は月20日勤務だったが、今16日。それだけ（県が報酬として払う）お金が減ってる。私はずっとやってたけど、後進育てんと、と交代した。今の人は3年目。一年一年延ばし延ばし（やってもらっている）。（教委職員。以下、イ）「じゃ次の人探さんと。」みんなやりたがらない。（検査員したら時間を取られて）自分の織れないと言って。子ども高校出したら（仕送りがなくなるから）できるとか言ったり、どうかと言ってるけど。

（ヨナグニサンの空繭から糸をとる事業について）、（穴が開いているので）つむぎしかできない。とても取りにくかった。

花織の染料について、〈使っているのは藍などですか？〉（琉球藍はなく）インド藍しかない。フクギ、車輪梅（シャリンバイ）も使う。〈クール（＝紅露：八重山諸島を北限とし山野に自生するヤマイモ科

の芋）は？〉育たない。何回かやったけど。〈では赤は何で出すのですか〉コチニール（＝サボテンにつく虫)、車輪梅とか。ピンクになる。染めてもみな同じ色にならない。それが草木染、って言ってるけど。ハイビスカスも使う。（イ）「木の皮（を使う）？」花も茎も木も全部。陽の光が強いからよ。花だけでは色がすぐあせる。紅花も、きれいなやさしい色だからといって染めたけど、織り終わるまでに色なくなって。紫はなかなかでないけど、アカンギがやさしい色で。

〈花織は明るくて華やかですね〉織り子が織ったのいくつかある。展示室のほうの（棚の衣装ケースから出してみせる)。内地の家族に送って仕立て屋に出したら、（私が）こっちが表と言っても、（裏表同じに見えるので）片袖は裏に仕立てられていた。

〈後継者育成は何年くらい前から始まったのですか。〉さあー。この建物できてから。復帰前…（イ）「講習しても育たんから」それが今、収入になると育ってきてる。

Bさん

始めて10年。いったんやめた（中断)。親の介護したりとか。〈始めたのは織物が好きで？〉全然。怖くて。Aさんがこっちがいいよ、と誘った。〈苧麻は、こちらではブーと？〉言う。

8.26.

1階　事務職員のみ

2階　Gさん、Cさん（ブー績み)、Dさん、Eさん（糸の巻取り)、Fさん。

〈織は、稼ぐための仕事ですか。趣味ですか〉(C) 仕事。(D) 家にいてできる。子どももいる。どうせ与那国にいるんだったらと始めた。前は、事務していた。（織は）面白いなーと思って。

（Cさんに）〈今日は夕方までずっとここで仕事ですか？〉いえいえ、休みながら。でも、織るのは精神が落ち着いてないと。（でも）選挙のこともあって（落ち着かないから織らないで、糸績みをしている)。糸もないし。（この調査のとき、臨時の選挙の直前であった。）ブー績みは、大事な仕事。ブーでドゥタティ織ってる。（だから課題の絹だけやっている）他の人より遅くなる。芭蕉もやってみたい。Aさんに教えてもらおうと思っている。

（2）第2回調査　'06. 3. 11. ～3. 12.

3.12　11時半頃

(展示会の期間中で、体験コーナーもある。Bさんがいる。〈夏におじゃましました。〉筆者を思い出す。)

（Bさんは）今回は、出品してない。交代で当番している。10名くらい出品している。

「織る？」と誘われ、筆者は織の体験をすることになる。（シダディ）

「これ踏んで！ちがうこれ！」と言う調子で、筆者はどちらが表か裏か、どのような模様になるかも分からず織る。昼時間になり、弁当を半分ずつしようと言われるがあいにく食欲がな

く、〈今は食べられませんので。〉Bさんは食べてくる。

「これはあんたの希望だけど、どれくらいの緯（の長さ）にする？」と聞かれる。

Bさん他の組合員が時々様子を見に来て、「きれいにできてる！与那国のじゃないみたいね」。「どこかな。」「インドとか！」と感想を述べ、筆者を励ます。

(B)「これ（見本）は伝統のシダディ（で、無地部分は白）だけどあんたはあんたの作ったらいいさ。だから、ここ（無地の部分）は、いろんな色にしたらいいと思うわけ。ピンクにしなさい。」「(私は別のところにいるから）バンバン織っておきなさい。」〈バンバンできるようにがんばります〉「(急にやってきて体験もできて、）あんた運がいいさー」〈今日は（日曜で）休みだと思って来れないつもりで連絡もしなかった。来れてよかった。〉隣の機は、予約が2時間待ちになった。(筆者以外の希望者は、かなり待っている。）途中、子どもが数名来て、「織りたいなー」と言うが、空いていない。

隣の講師役は、体験者に、こう、こうして、こう足が乗る、という具合につききりで教えている。(人によって教え方も違う。)

（当日は中学校の卒業式で）卒業式帰りの女性が見に来る。(筆者に向かって)「やめられんでしょう」(B)「ほかの人は追い返してから。」(B)「私の頃は、教えてもらえなかった。見て(まねして)、いろいろきつい目にあったり。今の人は幸せよー、と言ってる。(自分は）初級受けて、10年くらい離れてた。介護で。(講習で講師として）教えてはいない。」

（3）第三回調査　'06. 8. 7～8. 10.

06. 8. 10　AM

Aさん＝講習の講師

〈講習でドゥタティは織らないのですか？〉昨年、綿（＝ドゥタティ、シダディ、カガンヌブー）を織った。祭りとか、教委から注文がある。命令してやらせたりしている。今年は絹。これはお金になる。一反手取り10万で、みなこっちやる。心配と言ってたけど上手にやってる。でも、若い人で、続かない人がいる。〈半年（の講習期間も）持たない人いるんですか。〉半年はできるけどその後が。

講習は、6月～11月。材料費は全てこちらもち。前は修了後2年補助が出て、10万くらい出たら機も買えたが今はない。〈講習生は島に住んでないとだめだそうですね。〉島の人優先。指定（伝統工芸）だから。それでも続ける、って言う（島外の）人がいるが、住んでやってもらわんと。講習生のうち2人は別の仕事やってた人。子どもが小さくて、熱だなんだと（休んだりやりくりが）大変で機やったほうがいい、と始めた。他の島から長男嫁に来てどこにも出られないから、これを始めた人も。

〈絹の花織は最近から？〉20年位前からは指定（伝統工芸)。(本土で）賞とった。西陣とどっちにするか、となり、本当は指定でないからあげられんけど、と言われた。その後、指定になった。首里から、“宮古にも石垣にも（花織は）ない、なんで、与那国に。もとは首里のもの（なのに)”と言われた。古い花織持っていったら、“あったの。”と言われた。那覇は古い

ものが（戦争で）残ってない。

〈ドゥタティは自分たちで使うもので、花織は外に売るものですか？〉ドゥタティも売る。きれいですよー。上着作ってつけて、外国のファッションショーにもいった。こんなきれいな布あるの、と言われた。

(11時前、若い人が糸巻き部屋に来る。機械での糸巻き作業だが、筆者から見ても、ベテランのAさんと若い人では作業の仕方がずいぶん違う印象を受けた。)

（4）第四回調査　'07. 2. 25～2. 28.

2. 26　13：00

(12：00～13：00は休憩閉館で玄関はしまっている)。

事務職員Dさん～ドゥタティの綜絖(そうこう)通し。検査員、姉妹で染色室で作業している人、新事務職員（引継ぎ中)。

事務職員と、一階の床に腰をおろしてコーヒーを飲みながら話す。

この3月までで交代。講習は、H17年度、初級＝綿、18年度、中級＝絹。修了して2年は、ここで織れる。自分の工房で、講習待ちの人を教えたりしてる人もいる。今の講習生でも、藍のこと聞きたい人もいる。いろいろ知っている。あちこちで勉強した（らしい)。

〈与那国花織の課題はありますか〉年200反…希少ではあるが、織る人が増え、やめる人はそんなになく、増えていけば…（供給過剰になりダブつくおそれがある)。読谷（花織の「休業」）の例もある。〈現役の人は厳しい時代知らない？〉もう、立ち上げの頃の人は少ない。あとは聞いて知ってるとか…

〈染料は〉藍は、伝統工芸指導所の巡回指導が来てやる気になってたが、死なせてしまった。研修でやるくらい。お金出して南風原で染めてもらってる。紺も、注文が来ると嫌がる。研修以来やってなくて忘れた、とか。

〈絹の仕入れは、〉京都と鹿児島から買っている。つむぎは名古屋から。そうなってる。

染め（の材料）は、何でもある。チップは嫌われる。これ使ってたら与那国織でないと思ってるところへ、お客さんからも言われるとなおさら。コチニールも置いてるけど（使っていない)。

〈組合員は〉53名＋5名（講習修了生、07. 12.）－1名（亡くなった）＝57名に、平成19年12月でなる。そのうち現在ここでやってるのは3名。

〈(常時来ている人が少ないのなら、）道具、染料の管理は？〉私たち（事務員）で買って（おいて）おくだけなので。洗濯、染めのときは（組合員どうし何名かで）声掛け合ってくる。〈個人プレー？〉そうです。新講習生は5名、6月から開始。（誰かは）未定。

Cさん

（本島で）細い糸（絹の、繭からとりだしたままでよりあわせない極細の糸）で織った人いるでしょう。〈あれは大変！〉そうだけど、自分にはできないけど、見てみたいー。

（見本帳をもって、柄合わせに人が来る。Cさんにいろんな見本ありますよと勧められて横に座る。）色見本を見ながら、マス目にあわせて柄の計算をしている。
「1㎝に（糸が）15本入る、これ1㎝が四等分のマス、（計算）どうしようか？」〈先輩方は？〉そこまで厳密にしない人もいる。この（見本の）とおり（の柄）だったらいいけど、少し変えたい時は考えないと。（マニュアルは未整備。見よう見まね、経験、カンでやっているらしい。）織物の研究しているんですか？〈伝統工芸に携わる人がどういう気持ち、考えでこの仕事をしているのか、に関心があって話を聞いています。他の地域では、例えば、生活のためとか、憧れとか、儲からんけど面白いという人もいるし。〉

染めは、みんな違う。この人、という色になる。私なんかまだまだ素人、勉強中だけど、それが面白いな～と思う。私は勤めていた。ずっと織物に興味はあったが子どもが高校から出て行くまで、仕送りの間は稼ぐのが優先。仕送り終わったから、自分の好きなことできる。楽しい、好きなことしてお金が入る。自分の好きなように時間を使って、サボれば自分の収入減るだけ、自己責任でできる。〈織では、自分の分まではできても養うのは難しい？〉若い、といっても40代の、子どもが高校生とかの人もこれで仕送りしてる。でも、他の勤めや仕事みたいに、月これだけ、と決まってやっている。

（Cさんの所に戻り）〈下で聞いたんですけど、藍の研究したいんですって？〉稼ぐのが先です。余裕なくて。やってると、いろいろやりたいこと思いつくけど。研究してみたい。

先生（＝筆者のこと）だったら知ってるかもしれない、竹の繊維ってあります？〈聞いたことありますね。〉芭蕉布のところは、植えるところから教えるって言ってましたね。〈それ使わないと芭蕉布でなくなるのでそうしないと。〉へえ。〈芸大とかで研究したいと思います？〉余裕ができたら行ってみたいけど…

ドゥタティ、注文が入ってやってる。祭り用で、誰もしない（儲からない）。〈芭蕉のとか。よかったんでしょうね。〉組合が研究のためにやってくれたらいいのに、ブーだけで。〈組合や教委に残ってないんですか？民俗資料館とか…〉私が知らないだけであると思いますよ。
〈ドゥタティのような格子柄は、あちこちにありますよね。イギリスとか…やっぱり違うのでしょうか…何が違う？ときいてもいいでしょうか〉三色～白、黒、青って言うのも違うけど、これは碁盤だけど、タマ（玉）とか、ゴバン（碁盤）にタマとかある。基本がある。ギンガムと似ているけど、全然違う。（ギンガムは）やっぱり、コンピューターでやって、色付けた感じ。子どもたちに学校で安いので作るけどやっぱり違う。自分はつけたことないからよくは分からんけど。〈なかなか自分が作ったものは（売るので）つけられないですか？〉年配の余裕のある人はけっこう着物とか持ってますよ。

娘に成人式で振袖作って記事になった人がいる。〈色が華やかだし若い人にも映えるでしょうね〉見てみたらそうだった。おばあさんなんかが言ってたけど、あまり気が進まなかった。失礼なこと考えてたな、と思って。あれみると、花嫁衣裳もできるねーと思って。（筆者は色とりどりの色の内掛を想像するが）純白で。娘二人いるからがんばらんと。〈そんなこと考え

るとわくわくしますね〉そう。でも、今は稼ぐのが先。

5．整理と分析の試み

（1）与那国の織物の現状

古くは苧麻や芭蕉を原料としていた与那国の織物だが、現在は本土から絹や綿を仕入れている。絹を用い、与那国の草木で染めた色とりどりの花をちらす花織は、比較的新しいものだが、一反織り上げる手間は他の織物とほとんど変わらず、むしろ糸づくりの手間がかからない上により高い収入が得られるので、携わる人が多くなった。苧麻や芭蕉その他自給自足の材料を用いる伝統工芸と比べ、原料の確保が容易なこと、また、比較的高い現金収入が得られる点が違う。

（2）講習

与那国町で織の講習を受ける人は島内出身・在住者が優先である。島に3年以上住み、事業に携わると誓約書を書くことになっている。（1）にあった事情から、島内で、ある程度安定して続けられる見込みがある仕事として、希望者が多いようである。

講習終了後2年間は、工芸館で仕事をすることが推奨されているが、全員がそうしているわけではないようである。

（3）与那国織従事者の仕事へのかかわり

多くの人が、織の仕事について、以下のような長所を挙げている。

（ア）島に住みながら、家庭の事情などと時間をやりくりして自由に作業ができる。

（イ）ある程度安定した収入が得られる。

（ウ）作業の過程それぞれに喜びを見出せる。

（エ）地域の伝統文化に携わっているという誇りを感じられる。

生産に時間を要し、いくらでも収入を得られるものではないので、一家を養うには難しいが、比較的時間の融通が利き、自宅でもできる仕事として、主に主婦がこの仕事を選ぶ傾向がうかがえる。

島の産業、雇用は十分多いとは言えず、島には中学校までしかない。子どもは高校になれば必ず島を出、保護者は仕送りをしなければならない。そのとき、主婦が他の子どもの世話を続けながら比較的安定した収入を得られる手段として考えている、あるいは、仕送りの必要がなくなったので、自分の楽しみを優先した仕事として、織を選ぶという人がいる。

（4）課題と考えられている点

現在の形を作った第一世代がなくなり、危機感を持ったり、新しいことに挑戦したり、昔の織を復元したり、困難を克服していくことの必要性を強く感じる人が多いとはいえない。

習ったことを続け、一反10万円の収入を得ることに満足している人が多いと、歯がゆさを感じている人もいるようである。

引用文献

澤地久枝　2000　『琉球布紀行』新潮社
与那国町伝統織物協同組合　『与那国花織』（リーフレット）

参考文献

児玉絵里子　2005『図説　琉球の染めと織り』河出書房新社
真南風の会編　2002『清ら布　沖縄の風を織る光を染める』日本放送出版協会
与那嶺一子・幸喜新監修　2002『沖縄の染めと幻の花織　南の国の色とデザイン』
サントリー美術館